

# いい人がお金で困らない 仮想通貨

—新時代のルール—

Vol.10

これからのエンターテインメントは  
「感動への寄付」になる

text by Gen Matsuda

文 松田 元

まず手始めに、僕が考えているブロックチェーン関連ビジネスの一端についてお伝えします。

シンガポールを拠点にするWowoの関連企業に「Wowoエンターテイメント（登記準備中）」があります。

まずは、映画やスポーツ観戦などの分野にブロックチェーンを持ち込んで、観客にとつての楽しみ方を根本的に変えるつもりです。

現在、映画に関するビジネスモデルはひどい有様です。まず事前に制作委員会などを立ち上げて、映画制作に必要なお金を調達します。

に育てていってくれます。映画館で作品を観る前後が、最もテンションの上がる瞬間となるでしょう。

以前、戦時中の広島を舞台にしたアニメ映画「この世界の片隅に」は、クラウドファンディング（不特定多数の人がインターネット経由で他の人々や組織に資金の提供や協力を行うこと）によって制作資金を調達する試みを行いました。

クラウドファンディングで投資をした人については、その個人名や会社名がスタッフロールに載る特典が与えられ、話題性と人気を集めたのです。

スタッフロールに自分の名前が載るのなら、周囲に自慢したくなりまじ、SNSやブログにも書き込んでアピールするでしょう。

こうして「この世界の片隅に」は、小劇場から公開が始まった映画としては異例の大ヒット作品となりました。

最初は制作資金が不足していたために、苦肉の策でクラウドファンディングを始めたようですが、出資した人々の中に作品への強烈なコミット感覚が醸成されるなど、思わぬ派生

俳優やカメラマン、脚本家やスタイリストなど、数多くの人々の才能を集めながら、何年もかけて撮影し、せっかく劇場で封切りをしても、フタを開けてみたらお客さんがまったく入らず、黒字化には程遠い状態となってしまう作品の例は、枚挙にいとまがありません。

つまり、わずかな大ヒット作品によって、多くの赤字映画の穴を埋めているのです。これは、ビジネスとしてリスクを取っているというより、「丁か半か」の博打を打っているに等しい行為です。持ち帰ることができれば大金持ちになれる貴重な品物を調達しても、山賊に襲われて数十人に一人しか母国へ帰って来られない、シルクロードの商人のようなもので

す。その一方で、すべての最新作が一律で1800円という料金設定も、観客の立場を考えているのであれば、本来ありえません。法律で、映画を1800円で公開するよう映画会社に義務づけられているわけではないにもかかわらず、当然のように統一料金が設定されているのは不可解です。

効果が得られたのです。

ICOも、仮想通貨を利用したクラウドファンディングのようなものです。映画の制作のためにICOトークンを発行することは、むしろこれから現実的な選択肢となっていくでしょう。

また、SNSでの反応だけでなく、ICOトークンの売れ行きからも、封切り後の観客動員数がある程度予測することもできます。

観客動員数を増やして話題性を獲得するのなら、劇場に入ること自体は無料でできるようにして、作品を観ながら感動したときは、手元のウォレット端末（仮想通貨の財布）をクリックして、映画会社などに少額のトークンを贈れるようにするとい

でしょう。感動した対象ごとに、個別にトークンを贈ることも可能です。演技に感動したなら俳優に、ストーリーが素晴らしいと思えば脚本家に、ロケーションやカメラワークに心が動かされたら監督やカメラマンに、トークンを送信することもできるように

きつと、映画が娯楽の王者だった時代の栄光を、いまだに引きずっているのでしょうか。

ここにブロックチェーンの技術を導入して、ICOトークンをやり取りできる環境を整備させれば、映画ビジネスは今よりも大幅に合理化させられます。

映画制作も、ICOプロジェクトのひとつだと位置づけるべきなのです。そうすれば、制作の前から潜在的な観客に向けて、ホワイトペーパーのような企画書を披露して、資金を募ることができ

ます。脚本を書いたり、配役を決めたり、ロケハンや撮影を行ったり、そういった映画制作の各過程で、すべての製作状況をオープンにすることで、トークン購入の動機を喚起させることができます。

映画の公開前から、メイキング動画をインターネット上に流すこともできますし、場合によっては、撮影現場の生中継や、メッセージのやりとりも可能です。

こうすることで、潜在観客は映画に対する参加意識を、心の中で徐々に

感動したポイントが多ければ、ウォレット端末から、そのぶん多くのトークンが贈られますし、ひとつの感動が大きければ、トークン送信ボタンを連打できます。つまり、人を感動させればさせるほど、客単価が上がっていくのです。

逆に、つまらないと思えば、一銭も払わずに出て行くこともできます。現在のような統一料金よりも、はるかに合理的な価格設定ではないでしょうか。

ひょっとしたら、ひとつの映画一万円、三万円出す人もいるかもしれません。一方で、感動していながら、その気持ちを隠して「ただ乗り」する人も出てくるかもしれません。



「いい人がお金で困らない」仮想通貨 新時代のルール (KKR) センターズ  
定価：本体1300円＋税  
好評発売中



## Profile

実業家、投資家。  
早稲田大学商学部卒業。在学中より学生ベンチャーを創業。  
同時期、複数のベンチャー企業におけるインキュベーションを実施。  
卒業前の2006年2月、アズ株式会社を創業。  
現職は、株式会社オウケイウェイヴ代表取締役社長、OKfinc LTD. CEO、Wowo Pte.の事業・技術開発支援を担う。